

弁当箱の愛情

仙台市立高森中学校 3年 斧 田 文

私は中学校3年生、受験生だ。中総体が終わり夏休みに入ると、みんなが必死に勉強する。私も初めはだらだらと過ごしていた。しかし焦りを感じ始め、辛いと思いながらも毎朝8時のバスに乗って塾の自習室に行くようになった。朝から夜にかけて塾にいたので2食分必要だった。

「夜はお母さんがつくるから、昼は何かコンビニで買って食べなさい。」

この言葉を聞いて、私は驚いた。正直、コンビニの食べ物に私はあこがれていた。カップヌードルやコンビニのおにぎりをあまり食べさせてもらったことがなかったからだ。コンビニのおにぎりやサラダを食べた私の感想は「普通においしい」だった。昼にコンビニのものを食べ、夜は母の弁当を食べるという毎日を過ごした。そこで気がついたことがあった。それは一人で食べることのさびしさだった。家で家族と食べることが当たり前だったので一人で食べることには慣れなかった。一人で食べるご飯はとても早かった。

一人で食べることの孤独さを知り始めたある日。塾の友達も自習室だったので一緒にご飯を食べた。その友達は私がお弁当を毎日持ってきていることに驚いた。確かに彼女は毎日コンビニ弁当だった。彼女は母にお弁当を作ってくれるように頼んだが、いそがしいという理由で断られたそうだ。

「お母さん、えらいね。」

と彼女は一言だけ言った。そうだと思った。翌日、私はいつもと同じように塾のためにコンビニに寄った。ふとおにぎりを手に取り、後ろのラベルを見た。そこには聞いたこともないようなカタカナの文字が小さく刻まれていた。コンビニの食べ物が悪いとは言わない。簡単に持ち歩き、いつでも食べることができるからだ。そして種類も豊富だ。しかしやっぱりお弁当は栄養バランスが取れているからだ。母は毎朝早く起き、お弁当ができるだけ同じにならないよう悩んでくれていた。強い愛情が感じられた。コンビニは便利だがお金がかかる。お弁当には人の気持ちがこもっているが、人の苦労がある。

私は以前、母にお弁当ばかりは嫌だと文句を言った。いそがしくて作れない人もいて、それでも母は一生懸命作ってくれていた。それなのに文句を言った私は情けないと思った。それから私は、自分自身でお弁当をつくってみた。普段料理をしない私は野菜を切ることも難しく、また顔に湯気があたって熱かった。お弁当をつくることの大変さを知ることができた。

みなさんはお弁当に限らず家族がつくったものに感謝しているだろうか。誰かが一生懸命つくったものには愛情があり、その裏には必ず努力や苦労があるはずだ。そして自分のつくったものを喜んでもらえると、とてもうれしい。私は受験生の夏休み中に大きな発見ができた。

私は母への感謝を胸に今日もお弁当を食べる。